



Sredni Washtar

by
Saki (H. H. Munro)



超訳

スレドニ・ヴァシュタール

天邊舎



ごあいさつ

このたびは『超訳 スレドニ・ヴァシュタール』を手にとって頂き、ありがとうございます。

私自身の翻訳の練習と共に、青空文庫では掲載されていない作品の数々を紹介できればと思い立ち、パプーでの電子書籍化に至ったというワケです。

まだまだ勉強中の身ではありますが、誤訳もたくさんありますが、言ったモン勝ち・やったモン勝ち！精神にのっって厚かましくもアップしました。（え？超訳の向こう側をいっているような気がする？気のせいさ！）

なお、翻訳にあたって使わせてもらった原文のサイトは以下の通りです。こんな作品がタダで読めるのって本当に素晴らしいですね☆

参考URL：The Chronicles of Clovis / The Project Gutenberg

(<http://www.gutenberg.org/files/3688/3688-h/3688-h.htm>)

このトンデモ訳が、みなさんがサキ氏のミステリアスで何だか無性に惹かれる世界を知るためのきっかけになればと思っております。



2013年1月

訳者：尾崎チカ

※この作品は短編小説ではありますが、訳者の勝手な都合で前・後編の二部構成になっています。

本当は1ページでサラッと読めちゃうのにね！では行ってらっしゃいませ～。

サキについて (Wikipediaより)

ペンネームのサキ (Saki)として知られるヘクター・ヒュー・マンロウ(Hector Hugh Munro、1870年12月18日 - 1916年11月14日)は、ミャンマー生まれのスコットランドの小説家である。

『レジノルド』・『獣と超獣』・『クローヴィス年代記』などの短編集があり、欧米ではオー・ヘンリーと並ぶ短編の名手とされる。しかし日本での知名度はオー・ヘンリーほどではない。全部で2長編135短編および戯曲4編が発表されており、短編の半数以上は邦訳されている。

オー・ヘンリーの作風が庶民的で情緒的、サキのそれは貴族的で冷笑的、という見解が通説としてあり、登場人物や彼らの暮らしぶり等には確かに顕著な懸隔がある。しかし、両者とも掌編にて理不尽を描き出す巧者として今も並び賞されている。

参考URL : Wikipedia

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%82%AD>)

コンラディンは10歳だ。医者には、あと5年も生きられないだろうと宣告されている。この医者は物腰が柔らかく女性的なところがあつたので、少年の余命などただの数に過ぎないと励ましていた。だが、デ・ロップ夫人にとってその数こそが全てであつたようで、医者はこの医学的な見解を大いに支持した。少年の命もあと5年…。彼女はコンラディンの親戚で後見人だ。コンラディンの目には、デ・ロップ夫人が世界の6割を占めているように映つた。夫人の存在は「両親がおらず病弱な10歳の少年」が生きていくには必要不可欠で、不愉快ではあるが彼女の下で過ごすのが現実的である。前述した絶え間ない敵対心の他、彼の残り4割はというと、彼自身とその想像力であつた。夫人に支配される日々の中でコンラディンは、生活には欠かせないが非常にうんざりするものの圧力に負けてしまいそうだった。病気や制約違反、延々と続く倦怠感…彼は嫌気がさしていた。そこで想像力だ。孤独という暗く険しい頂に立ち向かつてくれる想像力なくしては、ぼくはずっと前に死んでいただろう。コンラディンは小さな胸にそんな思いを抱いていた。

デ・ロップ夫人は絶対に、自身の性根と向き合つたとしても、コンラディンを嫌いだとは言わないだろう。どこかで無意識に面倒だな、と感じつつ「親戚の子のためを思って」という責任からコンラディンの世話を続けながら、彼女はぼんやりと気づいていた。その親切が彼を苦しめているということに。コンラディンはデ・ロップ夫人が、必死な誠実さを前面に押し出してくるのが嫌でたまらなかつた。子どもの自分が上手く外に出さないようにしているのに、何でこの人にはできないのだろうか？うんざりする。だから想像の世界に没頭するのだ。コンラディンは、夫人が不快だと感じるであろうことを想像する時の喜びを糧に、何とかやっている調子だ。当然、コンラディンの想像の世界からは、デ・ロップ夫人本人は締め出されている。彼が不浄だと感じる者には、その世界への扉が用意されていなかつたのである。

ある日、コンラディンはもの寂しい庭に身を置き、気だるさの中で、多くの窓を眺めていた。それらはいつ何時でも開く準備ができている。あれをするな、これをするなと少年を怒りつけるためか、はたまた薬の時間を知らせる合図か…彼が聞く耳を持たなかつた類の言葉たちだ。実のなる木は抜かりなく、少年が摘み取ってしまわないようにと離れた場所に植えられた。なぜなら、それらの種が不毛な土地で花を咲かせる、珍しい植物だからである。あまりに珍しいので、365日分で10シリングという安い値段でも、首を縦に振る買い手を見つけるのが難しいだろう。そんな珍妙な庭の忘れられた一角には、今は使われていないますますの大きさの納屋があつた。暗い生垣の後ろにほとんど隠れているその場所は、コンラディンの特別だ。時に秘密基地のように、聖堂のようにと様々な表情を見せるその建物の中にいると、自分が守られているように感じるのだった。

少年はそこに親しい幽霊の軍団を住ませたことがあつた。歴史の断片から呼び出された者、コンラディンの空想の世界から呼び出された者と、種類は様々だ。しかしそこには、幽霊のほかに実体を持つ同居人もいた。納屋の一角には、みすぼらしい羽毛のハウダン鶏（※頭の羽毛が特徴

的なニワトリの一種。名前はフランス・ハウダン地方に由来している)がいた。コンラディンは惜しみなく愛情を注ぎ、それはとても淘汰された鶏とは思えないくらいのものであった。薄暗がりのもっと向こうには、大きなうさぎ小屋があった。二つに区切られた空間の一つの正面には、鉄の棒がつけてあった。そこは人懐っこい肉屋の少年がカゴなど全てをこっそり持ち込んでくれた大きなイタチ(※正式名称はヨーロッパケナガイタチ)の住みかだ。3ヶ月前に、コンラディンが長い間こっそり貯めていた銀貨のへそくりと交換してくれたのだ。

コンラディンはその敏捷で鋭い牙を持つ獣をひどく恐れていた一方で、彼の所有する最高額のものであった。その動物が納屋にいるという事実は、誰にも内緒だ。恐れで気絶しそうなくらいぞくぞくする楽しみであった。「あの女」の目に届かないように、細心の注意を払って飼いつづけた。

「あの女」というのは、もちろんコンラディンが親戚のデ・ロップ夫人を陰で呼ぶ時のあだ名である。

そしてある日、コンラディンは何を思ったか、ふと、素晴らしい名前を思いつき、その動物に与えてみた。すると、その瞬間からそのイタチは少年にとっての神になり、信仰そのものとなったのである。「あの女」は週に一度近所の教会に通っては信仰にすがる。その信仰にコンラディンはいつも付き合わされる。だが、彼にとって教会での礼拝は、リンモンの宮(※旧約聖書・列王紀下/5章18節に登場する。ユダヤ教関連なので異教と考えられている)で営まれる異質な儀式としか思えないのである。

コンラディンは、毎週木曜日には、うす暗くカビ臭い納屋の中でスレドニ・ヴァシュタールを崇拝した。その神秘的で手の込んだ儀式は、神格化されたイタチの住む、木製の小屋の前でとり行われた。コンラディンの作った聖堂には、春から秋までは季節の赤い花、冬には緋色のベリーが供えられた。なぜなら、スレドニ・ヴァシュタールは残忍で耐えられない出来事をねじ伏せてくれる神であったからだ。コンラディンはどうも全く信じることの出来ない「あの女」の信仰に逆らうかのごとく、日曜日の儀式とは正反対になるようにと、どんなことでもした。

大きな饗宴をひらく際にはナツメグの粉を小屋の正面にまき散らす。よってコンラディンは、ナツメグを拝借する必要があった。このような宴は不定期で祝われたが、主に過ぎ去ったイベントを祝うものであった。ある宴の場合、デ・ロップ夫人が3日間のひどい歯痛に苦しんだ時にひらかれた。コンラディンはその宴を丸3日も続け、スレドニ・ヴァシュタールが「あの女」にじきじきに歯痛を与えるだけの力を持っていると確信するのに成功した。歯痛がもう一日続いたなら、大事なナツメグが切れていたであろう！

ハウダン鶏はスレドニ・ヴァシュタールの崇拝に全く熱狂しなかった。コンラディンはこの鶏を再洗礼主義者(※幼児洗礼の無効を唱え、成人洗礼を提唱・実施し、真に聖化された信徒の自覚的共同体たる教会を追求する一派)であるとだいぶ前に決めていた。少年は再洗礼主義者が何であるのか全く知らないというそぶりをみせず、この言葉を使っていた。意味そのものよりも、その再洗礼主義者という言葉があまり褒められたものでないもので、そこがかっこいいと思っていたのである。コンラディンがこんな行動をとり、世間体を毛嫌いするようになったのも、デ・ロップ夫人の原因によるものだった。

しばらくすると、納屋での信仰の熱がデ・ロップ夫人に不審がられるようになった。

「いつもいつもあんな場所にこもって、よくないわ」

彼女はすぐにそのように思い立ち、ある日の朝食の席でコンラディンに告げた。昨夜のうちにハウダン鶏を売り飛ばした、と。夫人は、近眼の目でコンラディンを見つめた。激怒したり、悲しんだりするのだろうと思いながら。もちろん、素晴らしい教訓や理屈の数々でこの不健康な子どもを叱責する準備もできている。

しかし少年は何も言わなかった。いや、言うことなどなかったのだ。コンラディンの青白い顔に見る何かが瞬間的に夫人の気をとがめたのか、午後のお茶の席にはいつもは禁止しているトーストが置いてあった。健康に悪いというのと同時に、作るのが面倒なのだ。デ・ロップ夫人という名の中産階級女の目は、ものすごく攻撃的な光を放った。

「あら、トーストお好きだったでしょ？」

コンラディンがトーストに手をつけないのを見ると、デ・ロップ夫人は被害者面で叫んだ。コンラディンは、

「そうですね」とだけ答えた。

その晩、あの小屋では檻神様へのお祈りに新しい項目が追加された。コンラディンは祈りの言葉を慣れた調子で詠唱すると、この晩は願い事を唱えたのだ。

「スレドニ・ヴァシュタールよ、ぼくの願いを叶えたまえ」

それ以上は言わなかった。スレドニ・ヴァシュタールは神様だから、きっとわかっていると思ったのだ。かつてハウダン鶏のいた場所を眺め、悲しくなって泣きじゃくりそうになるのを抑えると、コンラディンは心の底から嫌悪する世界へととぼとぼと戻って行った。

その日から毎夜待ちに待った暗闇の寝室で、毎晩たそがれの納屋で、コンラディンのお祈りは幾度もそののどをついて出てきた。

「スレドニ・ヴァシュタールよ、ぼくの願いを叶えたまえ」

デ・ロップ夫人は、コンラディンがあ納屋に通うのを止めていないことに気づいていた。ある日、彼女は少年を取り調べるといふ大きな冒険に出た。

「お前は納屋に何を飼っているの？鍵まで掛けて」彼女は問い詰める。

「モルモット？モルモットでしょう？そんなもの、私が片づけてしまいますからね」

コンラディンは固く口を閉ざしていた。だが、夫人は少年の寝室をひっくり返して探し回り、それは注意深く隠された鍵を見つけるまで続いた。そして鍵を手に入れると、隠し事を暴くために、直ちに例の納屋へと向かった。寒い午後だった。コンラディンは家の中にいるよう命じられていた。ダイニングの一番奥にある窓からなら、生垣の角より向こうにある納屋の扉が見える

。だからコンラディンはそこに立って、様子を見守っていた。「あの女」が入って行くのが見える。

コンラディンは目を閉じて、「あの女」があの神聖な檻の扉を開けるのを想像した。いつもの近眼を光らせて、大事な神様が隠してあるぶ厚いワラのベッドをじいっと見つめるのだ。きっと優雅さのかけらもないせつかな手つきでワラの中をざくざくと刺しては掘り返すのだろう！コンラディンは後生だからと神への祈りを熱烈につぶやいた。と同時に、自分がスレドニ・ヴァシュタール以外の神を信じていないということも頭にあった。「あの女」が口を閉じたままにんまりと勝ち誇ったように笑う、あの嫌気のさす顔で出てくるのが目に浮かぶようだ。そして1、2時間くらい経った頃に、庭師が少年の最高の神様をどこかへと運んで行ってしまふのだ。神様？違う、もはやただのイタチだ！「あの女」はいつもそうだ。今回みたいにぼくをいつも打ち負かしては、あのうざったくて横暴で傲慢な知恵で、ぼくの病気を悪化させる。それはぼくが動かなくなる日まで続いて、お医者さんの言ったことは本当になるんだ！ぼくは、あと5年ももたない。敗北の痛みと惨めさを感じながら、コンラディンは命の危険が迫る神様を想って、大きな声で反抗的に讃美歌を唱い始めた。

スレドニ・ヴァシュタールがやって来る
赤く憤怒に燃える心と、白く猛々しい歯でもって
平和を求める仇には、死を連れてやって来る
美しき者、スレドニ・ヴァシュタール

そしてコンラディンは急に讃美歌をやめると、窓ガラスにかじりついた。納屋の扉はまだ半開きのまんまで、何分も経っている。時間は流れているというのに、ひどく長く感じるものだ。そこで、芝生の向こうでちょこちょこ走ったり飛んだりしているムクドリたちを見ては、何度も何度も数えた。だが片目ではあの扉を捕えている。渋い顔のメイドがテーブルにお茶を置きに入ってきたが、少年は相変わらず窓辺にじっと張り付いて外の様子を食い入るように見つめている。その小さな心には希望が少しずつにじり寄って来ていた。そして、以前はもの悲しい様子で敗北に耐えるしか知らなかった目には、今や勝利の表情がぎらつき始めていた。息をひそめ、傍目には気づかれないよう有頂天になり、コンラディンはもう一度勝利と荒廃への賛歌を口ずさんだ。しかし、その両目はすぐにその報いを受けるはめとなる。扉から現れたのはぐったりとした、黄色と茶色の細長い獣だった。日差しが急に陰ったので瞬きして目を凝らすと、どす黒いシミがあごやのどに生えた見事な毛を濡らしているのがわかった。コンラディンは膝から崩れおちた。少年の偉大なイタチは、庭のすそにある小川の水をほんの少しの間だけ飲むと、そこに架かる橋を渡り、茂みの中へと消えていった。それがコンラディンの見た、スレドニ・ヴァシュタールの最後の姿だった。

「お茶の用意ができましたよ。あら、奥さまはどちらに？」メイドが聞いた。

「少し前に納屋に降りていったよ」コンラディンは外を見据えたまま答えた。

メイドがデ・ロップ夫人をお茶へと呼びに降りている間に、コンラディンは食器棚からトースト用のフォークを探し出してきた。そしてパンを一つ刺すと、暖炉に向かって焼き始めた。それを焼いてたっぷりのバターを塗り、食べる時のゆったりとした喜びを噛みしめている間じゅう、コンラディンは自分の足元からもれる物音と静寂を聞いていた。下で誰か大人が、急な発作でも起こして倒れたような音だった。メイドの馬鹿みたいに大きな叫び声がして、それに呼応するようにキッチンの使用人たちが驚き、絶叫する声が響き渡る。そしてバタバタと足音がして、外界に助けを呼びに行く声がした。さらにその騒動の後には、ひどくおびえてむせび泣く声と、何か重いものを屋敷の中へと引きずっていくような、よろよろとした足取りが聞こえた。

「誰か可哀そうな坊っちゃんにこのことを教えてあげてちょうだい！私には耐えられそうにもないわ」甲高い叫び声が響く。少年の目には暖炉の火がゆらゆらと揺れている。コンラディンは何が起こったのかを悟りはしていたが、黙っていた。そして使用人たちがデ・ロップ夫人の件についてあれこれ話し合いをしている間も、黙って新しいパンを取り、赤々と燃える炎にかざして焼き続けたのだった。《完》

